

## 宮崎汎会員が見た世界の旅第3部歴史編第6話

### ヴィーナス (=アフロディーテ) 誕生 キプロス

ギリシャ神話ではアフロディーテは愛・美・多産・豊穡などを司る神であり、ローマではヴィーナスと呼ばれた。ヴィーナスは古来、美の象徴として人々に語られ描かれ刻まれている。

キプロスを訪れたとき、現地ガイドが真っ青な海を見渡す崖の上の展望台へ案内し眼下に見える三つの岩を指さし真ん中の岩を見てくれ、アフロディーテはあの岩に当たった波しぶきの泡から生まれたのだといった。



ヴィーナス生誕の地とされるキプロスのパフォスのペトラ・トゥ・ロミウ海岸

ギリシャ神話では最高の神ゼウスと女神ディオネの間に生まれた娘がアフロディーテだといわれている。

ヴィーナスを描いた絵画で最も有名な絵はフィレンツェのメジチ家の収集であるボッティチェリの描いた「ヴィーナスの誕生」だろう。此の横には「春=プリマベーラ」があり二つの絵画は終日人の波が絶えない。



ボッティチェリのヴィーナス誕生 ウフィツィ美術館



ルドヴィシの玉座ローマ国立博物館アルテン

ローマの国立博物館アルテンプス宮にあるルドヴィシの玉座“水浴するアフロディーテ”は、1887年ローマ市内のルドヴィシ邸から発見されたギリシャ彫刻で、何かの台座か祭壇の一部ではない

かといわれている。

誰もが知っている「ミロのヴィーナス」は、ギリシャのミロス島で発見された。白い大理石に刻まれた均整の取れた見事なプロポーションは観る人を魅了する。

おそらく美の女神ヴィーナス（＝ギリシャ語ではアフロディーテ）を想像する人は、ミロのヴィーナスを思い浮かべるに違いない。パリのルーブル美術館には二つの彫刻の至宝がある。

サモトラケのニケとミロのヴィーナスである。ミロのヴィーナスはかつてたった一度だけルーブルを離れて国外へ貸し出されたことがある。それは何と日本である。1964年日本で初めてオリンピックが開催された年で、160万人が観に訪れたという。

余談ながら世界の宝レオナルド・ダ・ヴィンチのモナリザがルーブルを離れ国外へ出たのは二度ある。1963年にアメリカへ貸し出され、そして1974年には日本にやってきたのである。

美の象徴であるヴィーナスは絵画や彫刻の題材として古今東西の芸術家に取り上げている。立ち姿、中腰、あるいは横臥しているなど様々なポーズをとっている。作者の画風によってクラナッハのように人間を細身に表現する作家は痩せぎすのヴィーナスを描いている。ローマのボルゲーゼ美術館には彼の描いた「ヴィーナスと蜂の巣を持つキューピット」が展覧されている。もしもボテロがヴィーナスを描いたらどんなヴィーナスに描くのか・・・何となく笑いがこみ上げてくる。アングルの描いた“グラウンド・オダリスク”はトルコのスルタンに仕えるハーレムの女性を描いたといわれているが、“グラウンドヴィーナス”と画題を変えてもいいのではないかと思うほど美しく描かれている。



ミロのヴィーナス  
ルーブル



クラナッハ ヴィーナスと蜂の巣  
を持つキューピット ボルゲーゼ



カピトリナーナのヴィーナス  
ローマコンセルヴァトーリ新宮



ティティアーノ ウルビーノのヴィーナス



アングル グランド・オダリスク ルーブル

余談) ヴィーナス誕生の地キプロスへ旅立つ日成田空港で文庫本を買った。機上にある間は一睡もできない性分なので、いつも空港で本を買っていくのである。今回たまたま手に取ったのは“情熱のナポリタン”伊吹有喜著ハルキ文庫である。機内の夕食が済みさっそくページを繰った。なんという偶然だろうか、これから向かうキプロスのチーズが記述してあるではないか。最近海外へ出かけるとスーツケースの半分は様々なチーズで埋まる。キプロスのハルーミというチーズは焼いて食すると美味しいとある。楽しみが増した。旅仲間の親友の奥さんはひろみさんというが、現地の店でハルーミを買うとき言い間違えてヒロミといって親友をびっくりさせてしまった。